

低炭素社会における「人間の移動」に関する 質的調査研究

Qualitative Studies on the Human Mobility in Low Carbon Society

研究代表者 奥野卓司

関西学院大学社会学部教授

Takuji Okuno, Kwansai Gakuin University

研究の大要

地球環境汚染の深刻化から、化石燃料を可能な限り使用せず、排出物が吸収・循環可能な「低炭素社会」の構築が提唱されている。

本研究では、来るべき低炭素社会における人間の移動文化・移動価値のあり方について、文化社会学の立場から総合的にアプローチしてきた。今後はさらに、生活者の意識・行動、移動体のデザインおよびアート、観光文化などの諸側面に着目しつつ、その変容の諸相を、日本およびアジア地域における質的調査によって解明するとともに、人々の移動観や移動技術の変遷を歴史的考察によって明らかにしていく。

Abstract

The severity of the global environmental pollution is growing by the year, and consequently, today the construction of low-carbon society which emissions can absorb and circulate has been proposed. We have investigated how Asian youths' and women's mobility culture will change in the future low-carbon society through qualitative research. From now on we will explore the aspects of transformation of mobility culture and mobility value focused on ordinary citizens' consciousness and behavior, vehicular design and art, tourist culture and so on. Additionally, we will examine the transition of the people's views and the technologies of mobility through historical consideration.

1. 研究目的

人類の歴史は、「ホモ・モビリタス」としての移動活動の歴史でもある。人間は、移動し、生活空間の開拓と拡大を繰り返しながら、寒いところ、熱いところ、高いところ、低いところなどの自然条件を克服し、人間が住める地域としてのエクメネを拡大してきた。しかし他方で、現代においては、これまでエクメネであった地域がアネクメネ(居住が困難な地域)に変化している。水の枯渇による砂漠化、海面上昇による低湿化、地震や洪水や噴火や地震による被災など、しだいに人間はこれまで住んでいた所から撤退を余儀なくされている。地球環境変動により、広大な地域が水不足に直面し、食糧危機が引き起こされることになろう。民族移動の結果、「環境難民」(安田喜憲)が発生し、それにとまなう文明の破壊や自然生態系の破壊をいかにして食い止めるかが、これからのグローバル社会における最大の課題となっている。

このような問題意識のもとに、われわれは来たる「低炭素社会」における「人間の移動」に焦点を当て、その道筋と帰趨について、歴史的な視点から考察をおこなってきた。本研究では、これまでの人間の移動の歴史について再確認するとともに、現代の情報化社会、ポスト近代社会における人間の移動がいかなる姿のもとに立ち現われてきているのかを俯瞰的にとらえることにより、その連続性と非連続性を見出すことが目的である。

われわれがとくに重視しているのは、この課題を「質的調査」によって解明していくという点である。社会的世界とは

人々の意味作用によって成り立っている。統計的研究も質的研究も「社会」を明らかにするという点で、両者のあいだに本質的な隔たりはなく、あるのは程度の差にすぎない。しかし、事例研究に基づく質的調査は、事象への長期的かつインテンシブな観察を通して、社会事象の多面性を全体関連的に記述し、人々の主観的世界や意味世界を理解するのに適合的である。地域や民族、階層などの相違を超えて、「人間の移動」がどこに向かうのか、そのありようを未来予測的に分析するには、個別事例に対するエスノグラフィーに基づいた仮説索出的なアプローチが何より必要であると考えている。

2. 研究経過

研究代表者がセンター長を務める関西学院大学「Zero Carbon Society 研究センター」(2010年設立)では、研究センター所属研究員を中心とした研究会を通じて、「1. 研究目的」で述べた問題意識および研究目的を遂行すべく、理論的・実証的研究をつづけてきた。2012年度に実施した研究会および現地調査は以下の通りである。

第1回研究会(2012年7月9日)

- ・ 総括班研究報告
- ・ 日産財団からの研究上の方向性確認
- ・ 日産自動車総合研究所の研究視点
- ・ 各研究班の研究状況の報告

第2回研究会(2013年3月15日)

- ・ 各研究班の研究成果の報告
- ・ 2013年度研究助成に関する選考委員

会報告

- ・ 2013 年度以降の Zero Carbon Society 研究センターの研究方針についての提案

第 3 回研究会（2013 年 3 月 16 日）

- ・ 若手研究者・女性研究者による研究報告
- ・ 日産自動車総合研究所の研究視点

マレーシア、シンガポール調査（2012 年 9 月）

- ・ 低炭素技術、未来型移動技術の先進国である同国において、移動体の未来像を探るべく、マレーシア政府文化観光省、科学技術環境省、交通省にてヒアリングを実施

3. 研究成果

本研究を通じて、われわれは、以下のような成果を得た。研究会での議論、世界史的視野に基づく歴史的考察、現地調査における観察の結果を列挙する。

(1) 人類の産業史を農業（内胚葉産業）の時代→工業（中胚葉産業）の時代→精神産業（外胚葉産業）の時代の三段階（梅棹忠夫）に区分するならば、現代はいうまでもなく、脳神経系や感覚器官の機能が支配的な精神産業（外胚葉産業）の段階に入っている。リカードの比較優位原理に反して、グローバル経済下においては、情報はコストをとまわずに最も速やかに移動するようになり、資本や技術も移動するようになった（技術移転など）。他方人間は、よほどのことがない限りは生まれた場所にしようとするがゆえに、

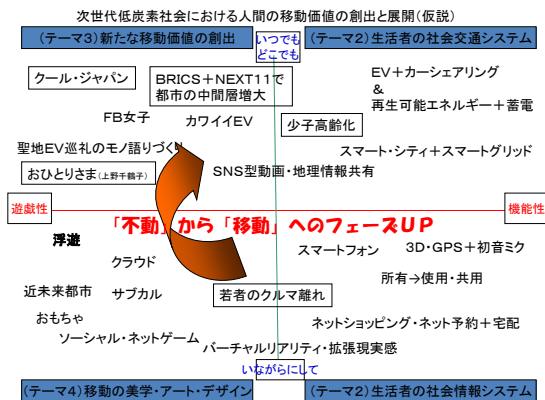
地域ごとに違った思考と行動のパターンを取るようになり、そこから宗教に基づく文化圏（キリスト教文化圏、イスラム文化圏、ヒンドゥー教文化圏、儒教文化圏）や国民国家が形成されてきたのであるが、グローバル化にともなう流動性ないし移動性の高まりにより、異文化間の接触が頻繁に生じ、人類文化のミックス化とフラット化が同時並行的に進行しつつある。

(2) 駅のターミナルや街の雑踏における群衆の動きを観察すれば明らかのように、群衆は流体力学にしたがうかのごとく一方向へ流れていく。しかしながら一方で、ベルヌーイの法則は粘性のない理想水流において成立するが、群衆の流れは時間帯によって異なり、必ずしも一様には流れない。見知らぬ人々（ストレンジャー）と日々接する大都市の生活は、人類の歴史のなかでみればまだ始まったばかりであるが、その短い期間に、非接触性動物である人間は、都市生活への適応のためにその本性を急速に変えようとしている。

(3) 都市が発展し社会秩序が構築されていけば、旧来の社会システムや都市インフラが大きく変化していくことは自明の理である。クアラルンプールでは他の東南アジアの都市と同じく、かつては乗合のミニバスが公共交通の主役であったが、ミニバスの荒い運転や車内マナーの悪さが敬遠され、現在では LRT（light rail transit）や大型の路線バスが公共交通機関の大部分を占めている。マレーシアが発展途上国から脱却していく過程で、クアラルンプールは首都として公共交通網と道路整備に多大な資金と技術を投入す

ることを迫られたのである。

(4)低炭素社会=近未来社会においては、一方では移動を伴わない「不動」が加速していくと思われるが、しかし他方で、そこに「移動」のトリガーが与えられれば、「遊戯性」に支えられた新たな移動価値が生み出され、「機能性」に支えられた移動価値と融合する蓋然性もまた高まっていくであろうと予想される(下図参照)。情報化とりわけインターネットを通じた自由なネットワークの形成は、この傾向をさらに加速していくであろう。



4. 今後の課題と発展

「人間の移動」がどう展開していくのか。またそれにともない、私たちの生活や文化がいかに変容していくのか。2年間の研究期間を経て、われわれの研究はまだ緒に就いたばかりである。この課題を明らかにするためには、今後も継続的な調査および理論的・実証的な分析が必要である。

工業社会から情報社会へと産業構造が転換していくなかで、人間そのものの「移動」だけでなく、自動車など「移動体」にかかわるテクノロジーやデザイン

も大きく変化しつつある。今後は、グローバル化の多様化するメカニズムと構造に焦点をおいて、アジア諸国における動向を見据えつつ、日本型モビリティ・モデルのあり方を構想していきたいと考えている。

なお本研究の成果は、将来的には「人間の移動」に関するシンポジウムを京都市や新聞社などとの共催により広く一般に公表する予定である。加えて、共同研究メンバーの成果をまとめた書籍を出版し、学術的貢献を果たすべく関係各社との調整をおこなっている。

5. 発表論文

『Zero Carbon Society 研究センター紀要』第2号(2013年度発行予定)